原郷、小さき漁港にて

日野笙子

原郷という言葉をこれまで私はよく意識することがなかった。だが最近になってその言葉を心に聞くように眼にとめた瞬間、イメージされる風景にひどくノスタルジックでなおかつ新鮮な感動を覚えたのだ。心に息づくある懐かしい光景のことだ。私は半世紀以上の歳月をすでに生きてきていた。

私が生を終える処はそういう場所でありたい、と思った。帰りたい心象風景なのだ。心が安住をひっそりと願うように帰郷するように、私は原郷という処に憧れる。

実際に具体性を持った場所ではない。はっきりとした風景ではないから思い描くときの心理状態はどこかもどかしい。遠い海辺の波の音だったり、里山に咲く花が散る川辺だったり、様々に想像は変幻する。

そのままでいいと思う気持ちもあるが、一方では観念の世界を彷徨するおぼつかなさを、一気に目の前にリアリティとして解消したい欲求もある。ときに小旅行に出かけたくなるのも、それを現実のものとしたい現れのような気もする。

夏になると、休暇の何日かを友人たちとニセコで過ごす。雄大な羊蹄山の麓である。近年の恒例の行事になっている。私はこの土地が本当に好きだ。北海道ならではの大自然をまるごと感じることができるような土地だからだ。春夏秋冬、どの季節もいい。

知人のログハウスを借りるのだ。自炊して散策したり山に登ったり温泉に入ったり、スケッチをしたり歌を歌ったり、一日で変わってゆく自然の色や感触、におい、鳥のさえずりそして仲間たちの笑い声、いつ訪れても忘れられない思い出が残る。夏のこの時期にはいつでもそのログハウスを開放してもらえる。人生のちょっとした休暇だ。

ニセコは作家、有島武郎の記念館がある処としても知られているが、機会があって有島氏の遺書を拝見した。私がこの広大な土地に惹かれるもう一つの訳なのかもしれない。小さき者へ残した言葉は心に染みた。それは、自らの死を自覚した者が、残された人々への感謝と愛を伝えるものだった。人が最後の最後に書いた遺書というものは、揺るがすことの出来ない、その人の紛れもない真実なのだ。私などは何も言えない。

年を重ねてみて私が生を終えるところは、心の確かな拠り処でありたいと思う。紛れもない本来の自分に出会う場所に。

私にとって原郷とはそういう意味合いを持っている。

かつて、ある街でタウン誌の記事を書いていたことがある。若い頃のことだ。
その街の人口は近隣の三つの町村を合わせて二十万弱だった。タブロイド判四面の紙面で部数は当時で二万部ほど。街の情報誌だ。広告や街のイベントそして読み物としてのちょっとした文章を書いていた。なによりも人との出会いが楽しかった。パートの仕事で今のようにＩＴ器機をそれほど自由に使えなかったから、企画から取材、記事、輪転機による印刷、発行、礼状を出すなど、結構時間を要し盛りだくさんの内容であった。さまざまな活躍をしている人の紹介記事を毎回書いた。新聞や主要な雑誌で取り上げられた人と重複しないように気をつけた。
実際によく歩き人の話を聞かせてもらった。私はプロのジャーナリストでもなんでもなかったからもっぱら素人精神が売り物だったと思う。喜んでもらえればそれでよかった。そこで取材した人の話を書くのだ。大抵は一度の出会いで話を記憶するようにし、安易な主観を入れぬように留意して書いたつもりでも苦慮した経験は多々あった。図書館へ行ってよく調べものをした。人の話を聞いて取材するということは、その趣旨をきちんと相手に理解されるように根気よくこちらも学ぶ必要があると痛感した。
若かった私はいたらないことが多かった。取材先から逆に教えてもらうことがなんと多かったことか。その街の人々はやさしかった。どの人も懸命に暮らしていた。裏方に徹する人や無名と言われる人に会えるのが嬉しかった。たくさんの人に会ったから忘れている事柄も多いが、なぜだかひっそりと澄んだ心で生きている人々に私は惹かれた。決して陽の当たる場所にいるわけではない人々を。ご本人は無名の人というが、これまたじっと話を聞いていると、なるほど、人生の達人なのだ。体験は本当に強い。
一方ではメジャーな街の話題も提供した。広告は大事な収入源だったからだ。近年は多くの種類のフリーペーパーが無料で発行されるようになった。時代は変わったのだ。いつの頃からか、その町の人口は半減し、どこか疲弊した感をぬぐえない街になってしまった。
その後、私は転居しタウン誌の編集の仕事も辞めた。あの頃出会った人々は今どうされているのだろう。
原郷についてこうして書いているあいだ、実は私の脳裏から消えなかった情景がある。それはタウン誌を書いていた頃の、ある漁師の女性との出会いだった。
海抜百メートル以上はある断崖絶壁の下の浜辺に、わずか二軒の漁民が身を寄せ合うように暮らしていた。荒々しい岩肌が垂直に近い形で聳え、太平洋に面した砂浜は上から見下ろすと目もくらまんばかりだ。風光明媚な絶景として知られる断崖が十三キロ以上続く

のだが、その展望台から見下ろしたところの砂浜に、よく見るとぽつんという感じで、漁師が暮らしていたのだ。

見渡す限り海だった。当時はテトラポットがあった。荒涼とした海には不可欠な波止めだった。険しい岩と静かな砂浜と波音。その対比が美しかった。秘境の砂浜だ。断崖の岬にはカモメやハヤブサなどの鳥が飛び交っていた。海鳥の楽園としても知られる断崖の連続地帯だった。この地区は近くに内海である港を囲む工業地帯や商店街が賑わっているが、この浜の静けさにあってはすぐには信じ難かった。変わった地形なのだ。

展望台から崖を降りる道も細く、急勾配で足場も悪かった。車ももちろん通れず、くねくねと、人がようやっと通れるくらいの道を下っていくのである。交通手段は太平洋の外海への船と、崖の上にある展望台からの自動車である。言ってみればちょっとした孤島だった。北国のこの土地の冬は想像を絶する厳しさだ。断崖の道は吹雪いたら歩けそうになかった。日常物資はまとめて運んでおくという。

春だった。やっとの思いで私はその道を降りた。不便で怖いところだと感じた。しかし砂浜に降り、立ってみると、なんて不思議な浜だろう、と感嘆した。静かだった。波の音と、海鳥の鳴く声だけが聞こえた。寂しくもあり、美しくもあり、その静寂と厳しい自然の中で暮らす人のなんとも言えぬ哀愁が漂っているのだ。

漁師の家の年老いた女性を私は訪ねた。二軒のうち一家族は夫婦で暮らし、もう一軒は女性が独りで暮らしていた。漁業で生計を立ててきた人たちだ。

私がお会いした方は夫婦の奥さんの方だったと思う。長い時間はとれなかったが印象的な出会いの記憶が残った。

老婦人はこの時も昆布の手入れをしていた。終始にこやかで、人の好さそうな丸顔が笑うとこちらまで穏やかな気分になった。おおらかなのだ。

そのときの私の問いかけはまったく愚問であった。

「こんな人のいないところで、寂しくないのですか？」

老婦人は言った。

「なんも寂しくない。こんなきれいな自然があるっしょ。毎日、海見てれば、飽きない。一日中居てもいい。ここの海はきれいだべ。ほら」

私はお土産に昆布と浮き球をもらった。昆布は肉厚の上等品だった。そしてこの海と空の色に似た見事なガラス玉は、本物の素敵な浮き球だった。ガラスに陽が当たってきらきら光った。

その後私はその街を離れた。何度か身辺整理をし、荷物を極力少なくして暮らしてはいるが、どうしたわけか、彼女から頂いた浮き球は今も本棚にある。この浮き球に目を懲らすと、その老婦人と人気のない砂浜が見えてくるのだ。不思議な巡り合わせだった。

いつの時代になっても、色褪せることなく人の心に残る光景、というものがあると私は思う。永遠に変わらぬものなどこの世に生きているうちはないのだろう。けれども、求めてやまないところがある。旅をするように私は自分であるための懐かしい風景を探す。そしてまた、世捨て人の心のように、それを観たり見失ったり、原郷への憧れは続くのだろう。私が私でなくなるところへゆくまでに。

《了》